

学校教育における在日外国籍教員の意義に関する研究

—在日外国籍教員ならびに生徒へのインタビュー調査に基づく検討—

専攻 教育実践高度化専攻
コース 心の教育実践コース
学籍番号 P10049D
氏名 朴 孝烈

太平洋戦争後、六十数年が過ぎ、日本社会は、様々な様相を呈している。そのことは、在日外国人、とりわけ、在日韓国、朝鮮人についても同様のことが言える。

戦後、六十数年が経ち、在日韓国、朝鮮人社会は、一世と呼ばれる人達から、二世、三世へと時代が代わってきている。元々、朝鮮半島に生活基盤を置き、民族名、民族言語、民族文化を持っていた一世の時代から、自らの根本を成す民族性の上に、日本語、日本文化に影響を受けた二世へと時代が代わり、その上、さらに、日本語、日本文化を多分に受けた三世への時代へと代わりつつある。そのため、在日韓国、朝鮮人（以下在日）社会の基盤も大きく様変わりをし、日本社会の上に生活基盤が成り立っている。つまり、民族の出自を除けば、二世、三世と呼ばれる人々は、日本人と何ら変わらない生活を送っており、日常においては、特別な場合を除いては、日本語を話し、日本文化を享受している。時代の経過と共に、朝鮮半島から日本に生活基盤が移り、当然の帰結として、意識的に、民族言語、民族文化を伝承しようとしないう限り、言葉、文化は日本人と同じ日本語、日本文化となっている。そのことは、年々減少している在日の外国人登録者数を見ても分かる。つまり、生活基盤が、日本にあって、日本語を話し、日本文化を背景に持つようになると、民族的な部分に自らのアイデンティティを求めるよりも生活基盤のある日本にそのアイデンティティを求める

こととなるのである。また、これらのことは、大阪市内の公立学校における在日児童、生徒の本名使用状況についても端的に物語っている。実際に、民族名を名乗っているのはわずか10%程度に過ぎず、日本名（通称名）を名乗っていると答えたのが70%を越えているのである。これらのことを考えると、民族を表す名前（本名）についても、既に、在日が日本社会において、生活する上での一つの選択肢となってしまっており、大阪府、大阪府が取り組んでいる民族的な誇りやアイデンティティを取り戻すことを目的に、また、自らの出自や自尊感情を育むために本名を名乗ることは、非常に意義のあることであるが、資料から見ても在日が本名を名乗ることは、一つの選択肢と考える方が、本名を名乗っていない在日からは受け入れられやすいのではないかと考える。

また、六十数年という時代経過から、日本社会において活躍する在日も多くなっており、そのことは教育現場でも例外ではない。教壇に立つ在日も少しずつではあるが増えており、その活躍が期待されている。しかし、その立場は、文部科学省通達によって、任用期限のない常勤講師に留まっている。また、上記の通り、在日には、様々な立場の教員がおり、そのために、在日教員の分類をわかりやすく、名前、言葉、文化（楽器演奏など伝えられるものとして）と三つの代表的な分類分けを行い、名乗る、名乗らない。できる、できないという形で、八つのカテゴリーに分けた。

従前、在日教員の求められていた立場は、ステレオタイプの、本名を名乗り、母国語を理解し、また、話すことができ、楽器の演奏等、何らかの文化を伝えることができる。というもので、教育実践報告会や研究会、研修会においてもそういった報告がほとんどであった。

しかしながら、実際には、在日教員は八つのカテゴリーで示した通り、少なくともこれらの分類に従った場合、在日教員の実践は、従前のものとは異なる。しかしながら、児童、生徒と関わりの中では、どのカテゴリーに属していたとしても在日教員であることには違いがなく、在日教員の意義とは一体何なのかをその共通性の中から、また、生徒へのインタビューから考察した。

その結果、在日教員は、その自らの実践の中で、児童、生徒を通して、自ら本名を名乗ったり、出自を話したりすることで、自らの差異性を最初に明らかにすることによって、児童、生徒にその差異性を強く意識させ、自らの立場や存在を児童、生徒に強く意識させるのである。そうすることで、その後の関わりの中で、児童、生徒自身が、在日教員の中に、差異性のみならず、同質性をも認識するようになり、そのことが、時間の経過と共に、同質性を感じるようになると、差異性に対する違和感を感じるものが少なくなったり、感じなくなったりするのである。そのことによって、差異性をも包含できる大きな同質性を児童、生徒は持つようになる。

また、児童、生徒が、最初の出会いにおいて、差異性を感じたり、反応が大きいほど、在日教員は、自らの自己肯定や自己矛盾を再認識しながらも、日々、教育実践を行うのである。その関わりにおいて、自分が、特異な存在ではないという同質性を児童、生徒自身が受け止めるようになると、在日教員自身の自己受容の確認の場となるので

ある。これらのことを考えると、在日教員は、小学校、中学校では、多少の違いはあるが、自らの立場、特に本名を児童、生徒の前で名乗ることは、とても重要であり、果たす役割はとても大きなものであると考えることができる。

つまり、在日教員の意義はとても重要であり、その後の教員活動も意義あるものとなっていくと考えられる。そう考えると、児童、生徒の前で、本名を名乗っている在日教員であるほうが、児童、生徒に、差異性を感じさせつつ、一方で、同質性を感じさせることができるのである。以上の理由から、その意義は、通称名を名乗っている在日教員よりも大きな意義があると考えられるのである。

修学指導教員 新井 肇

指導教員 安原 一樹